

(巻第一上)

第一段 ※前十五行欠カ

界を望む教の本意然へしと

いへとも正像已にくれて末法忽に

至り行證ともに絶て教法ひとり

身の□にきて

発して或は

五十六億七千万歳の霞をへ

て遙に龍花の春の朝をまち

或は多生曠却流転生死の雲

の秋の空

まことに貴しとい

へとも速證已にむなしきに似たり

是則理深く解浅きか故なり

次浄土門は末法萬年の流通

時にほと

人壽十歳の利物本誓

を無有出離の機に発給最下の

根機に蒙らしめて無上の深法を

意地の動静を用すして

これを超世の

願となつてこれを難信の法と

いふ機の勝劣をいはされハ三輩

九品等くゆき行に多少を論せ

念同く生す而に

名号を唱る人

ありといへとも多は三業にとゝ

まり又ハ四儀に煩て宗旨に暗

く安心にもとつかさる間往生を

れなる歟是併祖師

き先徳の遺誠に

違する故なり爰近來一遍上人

と申し聖の念仏勸進の趣

承るこそ有難く覺侍へき此人

七郎通広か子也

中に法師に成て学問

などありける頃親類の中に遺恨

を挿事ありて殺害せむとし

けるに疵をかうふりなからかた

取て命ハたすか

り発心のはしめ此事  
なりけるとかや

第二段

年の夏熊野へ参詣給

山復山青巖に雲をふみ水復水

碧潭に波を凌く玉津嶋の

叢祠に望めは光無明の闇を照

河の流水を渡れハなみ

生死のあかを洗ふかくて次第

に詣給ほとに律僧の行逢ける

に聖勸云一念信を發して南無

仏と唱てこの算を

給へと僧答云たゝいま一念の

信心をこり侍らすうけハ即妄語

なるへしとて承引せず而に

此僧念仏をうけハそこはくのへの

くうくへかりけるあいた

念仏勸進の方便のために必信心

をこらすともたゝ南無阿弥陀仏と

申て算をうけ給へしといハれ

しからハとてうければ

のこりの道者おなしく札を請ぬ

しかし勸進の趣冥慮を仰へし

とて本宮証誠殿の御前にして

願意を祈請したまふ目を

ていまたまとろまさるに

御殿の御戸ひらけて白髪なる

山臥のけたかくきよけなるか

長頭巾かけて出給なかとこに

三百人はかり侍るか首を

地につけて礼敬し奉る此時

権現にて御坐しけるとおほえ

て信心弥をこれりけるにかの

聖の前へ歩よりてのたまふ

やゝあの融通念仏すゝめらるゝ

聖如何に念仏をハあしくすゝめ

らるゝそ御房のすゝめによりてはし

衆生の往生すへきにあらず

阿弥陀仏十却正覺に一切衆生

の往生ハ南無阿弥陀仏と決定

するところなり信不信を論せず

浄不浄を嫌はずたゝ其札を  
賦てすゝむへしと示給とおほえ  
て目を開てみれ八十二三許  
なる童部百余人来て念仏の  
ふたをうけていつちともなくさり

ちかひを遮て頭給かたとし  
大権の神託に預て後他力  
本願の深意を領解せりとそ  
いはれける抑当山権現はこれ

孝照天皇御宇紀州無漏郡

備里に跡を垂給（依一ノ説）自爾以来  
一千七百余歳の暦数を経たり

□に所を無漏郡と名つく豈有  
為の境ならむや伝聞一此砌に  
詣るものは再悪趣に不帰と

誠此謂歟十却成道の如来内証  
を秘して暨垂跡の方便を廻し  
五却思惟の誓願外用を施して  
ついに本地の利益をあらハす  
此を証誠殿と号し奉る六方恒  
沙の諸仏もかくのごとく不可  
思議の功德を称讚し給歟名  
利を祈者には必菩提を証せ  
しめ仏果を求輩には正く寿福  
を授く此悲願余社に超給ゆえ  
に本朝第一大靈験の名を得た  
まへり而に今聖祈請の旨神慮  
にかなひけるにやまのあたりかゝる  
靈託に預給事ありかたくそ  
侍るこれによりて本願の名号  
を荷て国々を修行し遍く衆  
生に念仏を勧賜まで大隅正八  
幡宮へまうてられけるに御神  
のしめし給ける哥

とことはなもあみたふとゝなふれハ

なもあみたふにうまれこそすれ  
かくて村里にいたりつゝ念仏の

算を賦給算云南無阿弥陀仏（決定往生  
六十万人）

此中に六八のを弘誓を標して一乗  
の機法をあかす因中の萬行功  
を六字におさめ果号の一称益を

十方にほとこす是則一切衆生  
決定往生の記荊を授る者也

聖頌曰

六字名号一遍法 十界依正一遍体  
万行離念一遍証 人中上々妙好花

又云

十劫正覚衆生界 一念往生弥陀国  
十一不二証無生 国界平等坐大会  
或時よみ給ける

すてやらてこゝろと世をハなけきけり  
野にもやまにもすまれける身を  
すてゝこそみるへかりけれ

世のなかをすつるもすて

ぬならひありと

は

### （巻第二下）

#### 第一段（第三段）

建治三年の比九国を修行し  
給けるととき他阿弥陀仏始て  
随逐し給さて鎮西より洛陽の  
方へおもむきたまひけるに弘安  
元年冬のころ備前国藤井とか  
いふ所の領主なるか許にをはし  
て念仏すゝめ給けるにむすめ  
なりけるもの聖をたとひ法門  
聴聞して俄にさまをかへぬ  
かくて聖は福岡市といふところ  
にて念仏すゝめ給ほとにかの  
夫は備中国吉備津宮の神主  
か子なりおりふし他行したり  
けるか帰来て妻女を見るに  
はからさるに尼になりたり  
目もあやにあさましともいはむ  
かたなしことのゆへを尋ぬるに  
妻女こたへて云貴きすて聖の  
をハしつるか出離生死のおもむ  
き念仏往生のやうとかるゝを  
聴聞し侍りしにまことにゆめ  
まほろしの世あすを期すへき命  
にもあらねはかりのすかたはと  
てもかくてもありなんとおほえて

かくなりたりとそいひける

(巻第二上)

第一段

同二年信濃国佐久郡伴野

といふ所にて歳末の別時に

紫雲始て立侍けりさて其所に

念仏往生を願人ありて聖を

とゝめ奉りけるころすゝろ

に心すみて念仏の信心もお

こり踊躍歎喜の涙いともろく

をちけれハ同行ともに声をとゝ

のえて念仏しひさけをたゝいて

おとり給けるをみるもの随喜し

聞人渴仰して金磬をみかき鑄させ

て聖にたてまつりけりしかれば

行者の信心を踊躍の貌にしめし

報仏の聴許を金磬のひゝきに

あらはして長き眠の衆生をおとろ

かし群迷の結縁をすゝむ抑

おとり念仏は空也上人或は市

屋或いは四条辻にて始行給けり

彼詞云心無所縁随日暮止身無

所住随夜曉去忍辱衣厚不痛

杖木瓦石慈悲室深不聞罵詈

誹謗任口称三昧市中是道場順

声見仏息精即念仏夜々待

仏来迎朝々喜最後近任三業於

天運讓四儀於菩提文それより

このかたまなふものおのつからあり

といふとも利益なをあまねからす

而今時いたり機熟して化導諸国

にひろかりけるにや誠に能忍慈

尊二仏の間にも世々に仏出

給て済度利生し給かとそたとひ

あへりし

或時よみ給ひける

聖

をしむなよまよふ心ハおほえやま

いくのゝ露ときえやすき身そ

おもひしれうき世の中のすみそめの

いろくしきにまよふころを

第二段

同三年奥州へ趣給修行日を送

て地形一にあらす月は野草の露

より出て遠樹の梢をいとほぬ境も

あり日は海岸の霧に傾て双松

の緑にうつろふ所もありかくて白河

の関にかゝられるにせき屋を月の

もるかけは人の心をとむるなりけりと

西行の読侍ける思出られて関屋の

はしらにかきつけ給ける

他阿弥陀仏

しらかはのせきちにも猶とゝまらし

こゝろのをくのはてしなれば

聖も又よみてかゝれける

ゆく人をみたのちかひにもらさしと

名をこそとむれしらかわのせき

第三段

(欠)

(巻第二下)

第一段

弘安五年相模国龍口といふ所にて

利益せられたるに鎌倉の辺土な

れは貴賤上下群集す紫雲の立

朝もあり花のふる夕もあり瑞相一に

あらず其比詫麻僧正(于時)をくり給

状云

仏子公朝胡跪合掌而言

南無西方極樂化主阿弥陀仏南無

観音勢至諸菩薩清浄大海衆照無

二之誠心哀専一之勤修歳去歳来往

生願無倦若坐若立称念功漸積而

聞上人済度之悲願溺下愚随喜之

涙行且為結縁且為值遇奉寄書

信於沙村之浄場欲期引導於金

刹之妙土縦有前後之相違莫忘懇

勲之芳契恐々敬白

五月廿六日 法印公朝状

還来穢国上人足下

くもりなき空にふけゆく月もみよ

心ハにしにかたふける身そ

返報云

一称名号中 三尊垂化用  
十方衆生前 九品顕来迎

くもりなき空はもとよりへたてねハ  
心そにしにふくる月かけ

南無阿弥陀仏 六十万人知識一遍  
此人ハ園城一流の智徳として柳宮  
数代の護持を致す和漢の好士優色  
の名人なるを上人に帰依し給しさま  
なをさりならさりしは見奉り思へる  
所なからんやとそ覺侍りし

或人念仏法門尋申けるに  
念仏往生者念仏則往生也南無者能帰  
の心阿弥陀は所帰の行心行相応する  
一念を往生といふ南無阿弥陀仏と唱て  
後我心の善悪是非を論せず後念の  
心をもちいさるを信心決定の行者とハ  
申也只今の称名の外に臨終あるへからすたゝ  
南無阿弥陀仏〜と唱て命終するを期とすへし

## 第二段

同年七月のころ駿河国井田といふ  
所のをハしける時あちさかの入道  
と申もの時衆に入へきよし申  
けれどもゆるされなかりければさて  
いかにとして生死を離侍へきそと  
申にたゝ念仏申てしぬるよりほかハ  
別事なしとの給けるにさてはやすき  
ことに侍りとて蒲原にて待奉へ  
しとてゆきけるか富士河のはたにたち  
よりて馬にさしたる縄をときて腰に  
つけて汝等つみに引接の讚出すへしと  
いひけれハ下人共こそいかなる事そと  
申に南無阿弥陀仏と申てしねハ  
仏来迎し給と聖のおほせられつれ  
は極楽へとくしてまいるへしなこり  
をしむことなかれとて十念となへて  
河に入にけれハやかて紫雲水にうつ  
ろひ音楽なみにひゝく暫くあり  
て縄を引あけたれは合掌の  
印すこしも乱れす往生の相め  
てたかりけるとなむ聖哥云

心をハにしにかけひのなかれ  
ゆく水のうへなるあはれ

世の中

## (巻第三上)

### 第一段

尾張国甚目寺ハ推古天皇の御宇  
蒼海の底より観音像を感得したて  
まつりて伽藍を建立す靈験無双の本  
尊也こゝに聖請に応して当寺にして  
七ヶ日の行法を始行せられけるに供養力  
つきて寺僧等なけきあひけれハ聖の云  
心さしあらハ何ヶ日なりとも留へし衆生の  
信心より感すれば其志をうくる許也されハ  
仏法の味を愛樂して禅三昧を食とすと  
いへり若身のために衣食をことゝせハマ  
たく衆生利益の門にあらずと在家に立  
向は是随類応同の儀也ゆめ〜なけき  
給へからす我と七日をますへし〜との給  
ける其夜萱津宿に侍る在家人あ  
また同時に夢想を蒙る此本尊の  
傍に坐す毘沙門天に彼宿におはして  
我一大事の客人を得たりかならず  
供養すへしと示給仍其朝あひともなひて  
夢想の様しか〜と語申て供養をのへ  
ける時みたてまつれば此毘沙門御座を  
さりてあゆみ出たまへり人皆不思議の  
思に住して寺の伝記に載畢彼多門  
天ハもとよりかゝる靈験をあらハしたまふ  
事多しとそ申つたへたる又僧尼両方  
の隔に十二の箱をゝきて蓋の上  
に白き色を四五寸許一すちとをされた  
り是ハ水火の中路白道に准て男  
女の愛恚の煩惱をさけむか為也かす  
十二は十二光の心なるへし又ハ函蓋  
相応の儀能所不二の理を表されける  
にや 或時書給ける誓願文云  
我弟子等 願従今身 尽未来際  
不惜身命 帰入本願 畢命為期  
一向称名 不説善悪 不行善悪  
如此行人 依本願故 阿弥陀仏  
観音勢至 五々菩薩 無数聖衆

六方恒沙 証誠諸仏 昼夜六時  
相續無間 如影隨形 無暫離時  
慈悲護念 令心不乱 不受橫病  
不遇橫死 身無苦痛 心不錯亂  
身心安樂 如入禪定 命斷須臾  
聖衆來迎 乘仏願力 往生安樂

又ある人法門たつね申けるに書て  
つかはされける

春過秋来れともすゝみかたきハ出離  
の道花をおしみ月をなかくてもおこ  
りやすきハ輪廻の妄念也罪障の  
山にハいつとなく煩惱の雲あつくして  
仏日の光眼に遮す生死の海には  
無意の風はけしくして真如の月  
やとる事なし生を受に随て苦みく  
るしみをかさね死に帰にしたかひて  
くらきよりくらき道におもむく  
六道の衢にハ迷はぬ処なく四生の  
柩にハやとらぬ棲なし生死の転変を  
は夢とやいはむうつゝとやいはむ是  
を有といはむとすれハ空とのほり煙と  
きえてむなしき雲に影をとゝむる人  
なし無といはむとすれは又恩愛離別  
のなけき心中にとゝまりて腸をたち魂  
をまとはさすといふ事なし彼芝蘭の契  
の袂にかはねをは愁歎の炎にこかせとも  
紅蓮大紅蓮の氷ハとくる事あるへからず  
鴛鴦のふすまの下に眼をハ慈悲の  
涙にうるをせとも焦熱大焦熱の炎  
はしめる事なかるへし徒に歎きいた  
つらに悲て人もまよひ我もまよはむよ  
りハ早く三界苦輪の里を出て  
程なく九品蓮台の都に詣へし  
爰苦悩の娑婆ハたやすくはなれかたく  
無為の境界はなをさりにしていたる  
事をえす遇本願の強縁にあへる時  
いそぎハけますしてハいつれの生をか期  
すへき他力の称名ハ不思議の一行也  
弥陀超世の本願凡夫出離の要道  
なり身を忘て信樂し声に任て  
唱へし

又和讃を作て時衆にそあたへられける

讚云

身を觀すれハ水の泡 消ぬる後ハ人もなし  
命を思へハ月の影 出入る息にそとゝまらぬ  
人天善処の形をハ 惜とも皆たもたれず  
地獄鬼畜の苦みハ 厭とも又受やすし  
眼の前のかたちハ 目しみてみゆる色もなし  
耳の辺のことの葉ゝ みゝしいて聞声そなき  
香をかき味みする事 只しハしの程そかし  
息のあやつり絶ぬれハ 此身にのこる功能なし  
過去遠々の昔より 今日今時にいたるまで  
おもひと思事ハみな かなはねハこそ悲けれ  
聖道浄土の法門を さとりと悟る人ハ皆  
生死の妄念尽すして 輪廻の業とそ成にける  
善悪不二の道理にハ 背はてたる心にて  
邪正一如と思なす 冥の知見そはつかしき  
煩惱すなはち菩提そと 聞て罪をハつくれとも  
生死すなはち涅槃とハ いへとも命を惜かな  
自性消浄法身は 如々常住の仏なり  
迷も悟もなき故に 知もしらぬも益そなき  
萬行円備の報身ハ 理智冥念の仏なり  
境智二もなき故に 心念口称に益そなき  
断惑修善の応身ハ 随縁治病の仏なり  
十悪五逆の罪人に 無縁出離の益そなき  
名号酬因の報身ハ 凡夫出離の仏なり  
十方衆生の願なれハ ひとりも漏るとかさなき  
別願超世の名号は 他力不思議の力にて  
口にまかせてとなふれハ 声に生死の罪きえぬ  
初の一念より外に 最後の十念なけれども  
思をかさねて始とし 思のつくるを終とす  
思尽なん其後に 始め終ハなけれども  
仏も衆生も一にて 南無阿弥陀仏とそ申へき  
早く万事をなけすてゝ 一心に弥陀を憑つゝ  
南無阿弥陀仏と息絶る 是そ思のかきりなる  
此時極樂世界より 弥陀観音大勢至  
一時に御手を授つゝ 来迎引接たれ給ふ  
或野原を過られけるに白骨おほくみえ  
ければ 聖  
おしめともつゝに野原にすてゝけり  
はかなかりける人のはてかな  
ハかなしやしハしかはねのくちぬ程  
野原のつちはよそにみえけり  
かハにとそおとこをんなの色もあれ

ほねにハかはる人かたもなし

## 第二段

江州大津の関寺につきたまひけるに  
叡山桜本兵部阿闍梨宴聡といふもの侍り  
一遍房の関寺にあむなる行て法門いひて  
御房達につめてきかせむといひけるを処々  
にても学匠多く帰伏のよしきこえ侍り  
いかゝあるへかる覽と門徒に制けれとも  
何程の事かあるへきとてゆき向ぬ宴  
聡一遍房とせめ合へかなりときゝて  
若学匠共ハしり集てみけるに  
宴聡聖の前へ近く居よりたりいかゝ  
發言せむす覽と耳をすましけるに  
折りふしやまのいもをめしけるをくいきりて  
あの御房これめせとてさしいたされたりける  
を左右の手を出て請取てくいける間  
庭上に立ならひたる大衆同音にハと笑  
ける中に全範美濃堅者といひける悪  
僧面にあらハれてつむるまでハ思よらし  
おろしをくいつる上ハと高声にいひけれハ  
諸人比興の事にのゝしりあへる程に宴聡も  
おかしけに思てをとりて念仏申さるゝけし  
からすとハかりいひけれハ

聖

ハねはねはをとらハをとれ春駒の  
のりの道をハ知人そしる

返し 宴聡

心こまのりしつめたるものならハ  
さのみハかくやをとりはぬへき

又聖

ともはねよかくてもをとれ心こま  
弥陀の御のりと聞そうれしき

其後宴聡は発心して念仏行者と成て  
安樂五房に籠居の志ありけるか同朋共  
の間来も詮なく覺て小野宿辺に  
小泉といふ所に庵結て五穀を断し  
名号を唱て往生を願けるとそきこえし  
又或僧心こそ詮なれ外相いかてもありなん  
といひけれハ 聖

心より心をえむとこゝろえて  
こゝろにまよふ心なりけり

又ある時

心をハ心のあたとこゝろえて  
心のなきを心とハせよ  
とにかくに心ハマよふ物なれハ  
南無阿弥陀仏そにしへ行くみち

## (巻第三下)

### 第一段

同年閏四月十六日関寺を立て洛中へ  
入給四条京極の釈迦堂にて行法  
有けるに種々の瑞相耳目を  
おとろかしけれハ馬に鞭うち車に  
脂さして門前市をなす其時  
入道前のおほるまうちきみ  
一念往生の法門尋申されて後  
たてまつられける  
一声とほのかにきけと郭公  
なをさめやらぬうたゝねの夢

返し 聖

ほとゝきす名のるも聞もうたゝねの  
ゆめうつゝより外の一声  
同人出離生死の趣尋申されけるに  
他力の称名ハ不思議の一行也弥陀  
超世の本願凡夫出離の直道也  
諸仏の深智必所及況三乗浅智  
の心をうかゝハむやたゝ諸教の出離  
を耳に留すして本願の名号を  
口にとなへ称名の外に我心をも  
ちいさるを無疑無慮乗彼願  
力定得往生といふ南無阿弥陀仏と  
唱て我心の無成を臨終正念と  
いふなり此時仏の来迎に預て極樂  
に往生するを念仏往生と云也  
又頭弁なりける人安心尋申ける  
に

念仏往生とは我等衆生無始以来十  
悪五逆四重謗法闍提破戒邪見  
等の無量無數の大罪を成就せり  
是によりて未来無窮の生死に  
輪廻して六道四生二十五有の間  
もろゝの大苦惱を受へき者也  
然法蔵比丘五劫思惟の智恵名

号不思議の法をさとりえて凡夫  
往生の本願とせり此願已に十劫  
以前に成就せし時十方衆生往生  
の業南無阿弥陀仏と決定す此覚  
躰阿弥陀仏と云名にあらはれぬる上ハ  
厭離穢土欣求浄土の心さしあらん  
人ハ我機の信不信浄不浄有罪  
無罪を論せず只かゝる不思議の名  
号を聞得たるを悦として南無阿  
弥陀仏とゝなへて息たえ命  
おはらむ時かならず聖衆の来迎ニ  
あつかり無生法忍に叶へき是を  
念仏往生といふ南無阿弥陀仏

一遍

弁殿

## 第二段

其後雲居寺六波羅蜜寺次第に  
巡礼して空也上人の遺跡市屋  
に道場をしめて数日をゝくられしに  
勢至菩薩の化身にてましますよし

唐橋院法印恵靈夢記を持参たりける

に念仏こそ詮なれ勢至ならずは  
信すましきかと所示されけるさて因幡  
堂に詣給此尊ハ釈迦如来御自作の  
靈像祇園精舎療病院の本尊也  
長保年中月氏の雲を出て日域の堺  
にうつり給当寺執行覚順瑞夢の告  
あるよし申けるによりてしはらく逗留  
有ける比前天台座主菩提院見参  
ありて他力本願の法談など有けるに  
出離生死の業は念仏に思定侍ぬ命  
のなかきことを歎つるに御済度に預へ  
き宿縁にて侍けりと悦給けり  
又竹中法印承詮参て阿弥陀仏の本願  
善導和尚の素意を自宗の法門に  
引合てたつね申けるに三ヶ日の間  
委細問答有ける程に超世の悲願名  
号の功能を領解していかなる不思議  
の本願なりとも自宗の三論即是の上  
の絶待に不思議の妙にハよも超しと

こそ思侍つるに誠に貴き超世の願力  
にて侍ける承詮か出離ハ念仏におちつ  
き侍ぬ此恩徳申尽かたしとてそののち  
は円頓速疾の妙行をさしをき他力  
本願の名号に帰して往生をとけゝると  
なむ如此の明匠高德も信敬せられける  
上は末学浅智の輩ハいはざるにをのつ  
から帰伏しけるとそ京中利益の後  
同年六月廿二日かつらにうつり給時いさゝか  
煩事のおハしけるに書て出されける

夫生死本願の形は男女和合  
の一念流浪三界の相ハ愛染  
妄境の迷情也男女かたちや  
ふれ妄境をのつから滅しなハ生  
死本無にして迷情こゝに尽へし  
花を愛し月を詠するやゝもすれハ  
輪廻の業を仏を思ひ経をおもふとも  
すれハ地獄の炎只一心の本源ハ  
自然に無念也無念の作用は  
眞の法界を縁す一心三千に遍  
すれとも本より以来不動也  
雖然自然の道理を失て意樂の  
懇志を抽て虚無の生死に迷て  
幻化の菩提をもとむ如此凡卑  
の族ハ厭離穢土欣求浄土の  
志探して息絶命終を喜び  
聖衆の来迎を期して  
弥陀の名号をとなふへし  
臨終命断の刻無生法  
忍に叶へき也

南無阿弥陀仏

## (巻第四上)

### 第一段

ハ聖徳太子の建立  
仏法最初の霊場也伽藍はまた  
釈迦如来転法輪の古跡当極樂  
東門中心の勝地なり五十余代の  
帝王尊崇あらたまらず六百余廻  
たりといへとも馬  
くちすして露盤光かゝやき  
亀井流れ久して法水絶事

なし金鐸宝鈴の和鳴る風

清涼の響を振ひ功德莊嚴の微

かさをひらく

参詣し給へり其

比金堂の御舍利つほのうちにとゝ

まりて出給はぬ事侍りけるを不

思議の事に申あへり当寺のなけ

たる間臨時に舞樂

曲の袖をかunate

昼夜に肝胆をくたきて高僧

密法のかすを尽といへとも猶出給

はずして数日に及へり而に執行

聖へいさゝか御祈念あるへきむね

利出給はずは

なかく寺中を出ずして命をつく

すへしと七日祈請して出給に三

粒の御舍利悉く出現給へり常

住の僧侶奇異の思を成し参詣

誠をいたせり

参籠日数をかさね給間

に或時は瑞花風に乱れ或時は

霊雲そらにたなひく凡不思議

多しといへとも委くしるすに

み給ける

聖

おもふことなくてすきにし昔さへ

しのへはいまのなけきとそなる

いにしへはこゝろのまゝにしたかひぬ

にしたかへ

## 第二段

正応元年十二月十六日豫州三嶋社

へ参詣あり当社ハ文武天皇御

宇大宝年中に跡をたれ給ふ

自爾以来五百余廻の鳳曆をかさ

ねて八十余代の龍図をまほり

まします彼社壇に三ヶ日の間

念仏法樂して別宮へうつり給

けるに海中にて俄にそらかきくも

りあめしきりにふりければ聖こ

れたゝ事にあらず明神すなはち

なこりの袖をしほれとおほしめす

にこそとてわさとぬれ給ければ

諸人おなしくぬれゝふねを

こきゆくほとに海鹿といふ大魚数

をしらす浪をたてゝふねの艫舳

はねおとりけりすこしも人にお

そるゝ事なし半時はかりありて

うせにけり不思議のことにそいひあへ

りけるさるほとにやかて年も

くれければ別宮の社壇にして恒

例七日の別時ありけるに三島大

明神影向しましゝて念仏結

縁のためきたれるなりさても

三嶋を出給し時魚と化してを

くりたてまつりしはしり給け

るにやいなやと明神御ものかたり

ありしかはとかく申やるかたなく

たゝ恭敬謁仰の信心はかりにて

落涙せられきと後日にのたまひ

けるにこそありし奇特もおもひ

あはせられて人皆信をとり侍

りにけれ

或時聖頌曰

弘願一称万行致 果号三字衆徳源

不踏心地登臺台 不仮工夫開覚蔵

## 第三段

同二年正月廿四日夜三嶋宮の神

官社僧等に夢想のつけありけり

一遍上人今一度当社へ請し入

奉へし我光をやはらけて塵

にまはりしより以来三熱の苦

を受けていまたやむ時なし而上

人の念仏法樂によりて三熱の

炎忽に消滅す供養物など人

の煩なるへからず桜会の頭をとゝ

めて経営すへしと示給といへとも

恒例の御頭をとゝめ侍らむ事憚

ありて猶披露せさる処に三嶋地頭

社壇に通夜してすこしまとろみ

たりけるに白髪なる老翁の束帯

たゝしくて御殿の扉ををしひら

きてのたまはく一遍上人を請し奉へきよし宮人等に度々示すといへとも敢て用す汝いそき入奉へし若承引せずして我をうらむなど示給時やかて夢覚ぬ身の毛よたちておそろしなといふはかりなし則此事を相尋ところに夢想の告しかなりと五人同心に申けれハ霊夢殿重の上は聖を請し奉へし但桜会の御頭をとゝむるに及はず各か當なるへしとて同二月中旬に廿余艘の船をとゝのへて今針といふ津へこきむかへりそれより船に乗て詣給にけり此度ハ大明神の御召請なりとて万人瑞籬にあゆみをはこひけり神慮もさこそ御納受あるらめとて時衆以下の門弟恭敬謁仰の信心おこりけれハ行法も今一しほ貴かりけるとかや抑当社にハ桜会并に大頭とて二度の供祭あり彼大頭には一向魚鳥の類をもて贄に備けるに上人庭踊の最中に御贄を精進の物に申替むと思心俄にうかひ給ければ則宮人等に仰あはせられけるにこれ併神の御託宣にこそとて自今以後は精進の贄を供すへきよしをのゝゝさため申けり昔もかゝる例侍り桜会の頭には鹿の生贄を奉けるに書写山性空上人参詣の時生贄をとゝめらるへきむね祈請申されたりけるに立ところに神殿動揺して随喜すことたへたまひけるによりて生贄をはとゝめてけり先蹤といひ霊夢と云感応のおもむき新なるうへはとてまいりあへる神官国中の頭人等聖のをしへに任て向後たかふへからすと制文をかき連署して御宝殿に籠置けるとかや希代の不思議とそ申侍りし

或時よみ給ける

あみたふはまよひさどりのみちたへてたゝ名にかなふ息ほとけなりをのつからあひあふときもわかれてもひとりハいつもひとりなりけりあともなきくもにあらそふ心こそなか／＼月のさはりとはなれこゝろからなかるゝ水をせきとめてをのれとふちに身をしつめけり

#### (巻第四下)

##### 第一段

同年五月の比讚岐より阿波に遷給時機縁すてにうすく成て人教訓に拘らす生涯いくはくならず死後近きにありとの給けるを人々哀なる事におもひあひけるに其後いく程なくて大鳥里河辺といふ所にて六月一日より聊煩事のおハしけるにおもふことみなつきはてぬうしとみし世をはさなからあきのはつかせ

さて七月のはしめつかたに淡路のふくらのとまりにうつり給とて又よみ給ける

きえやすきのちは水のあはち嶋やまのはなから月そさひしき

あるしなきみたのミ名にそ生けるとなへすてたるあとの一声

名にかなふ心はにしにうつせみのもぬけはてたるこゑそすゝしき

かくなやみながら猶念仏すゝめてありき給けるに道のほとり塚の傍に身をやすめて

旅衣木の根かやのねいつくにか身のすてられぬところあるへき

さる程に兵庫よりむかへにふねをたてまつりければいなみ野の辺にて臨終すへきよし思つれとも

いつくも利益のためなれは進退縁にまかすへしとて兵庫島へわたりたまひぬ

##### 第二段

さて兵庫嶋へ渡りて観音堂に

宿給其比他阿弥陀仏病悩のこと  
ありけるに聖曰我已に臨終近付  
ぬ他阿弥陀仏はいまた化縁つき  
ぬ人なれば能々看病すへきよしの  
たまふしかるに所々の長老たち出  
来て御教化につきて機之三業  
を離て念仏ひとり往生の法と  
領解し侍ぬ然而猶最後の法門  
うけ給らむと申ければ三業外の  
念仏に同すといへともたゝ詞はかりに  
て義理をも心得す一念発心も  
せぬ人ともとて他阿弥陀仏南無  
阿弥陀仏はうれしきかとの給け  
れはやかて他阿弥陀仏落涙し給  
上人もおなしく落涙流給けるに  
こそたゝ人にあらず化導をうけ  
つくへき人なりと申あひけれさて  
遺誠の法門を書給其詞曰

五蘊の中に衆生をやまする病  
なし四大の中に衆生をなやま  
す煩惱なし本性の一念をそ  
むきて五欲を家とし三毒を食  
として三悪道の苦を受事自  
業自得の道理なりしかればみつ  
から一念発心せずより外ハ三世  
諸仏の慈悲も及はざる所なり  
八月中旬より病悩弥増氣して臨終  
ちかつき給訪に人も来り書札など  
ありければ他阿弥陀仏はからひて  
返事せらるへし今は念仏の外  
他事あるへからすとて其後ハ人に  
対面ある事なかりけり同廿二日聖  
とこつめのいたきかと思たれば神  
の結縁に來給てつみしらせさせ給ける  
よといはれけるを人心得すして不審  
をのこしけるに其日は西宮の祭にて  
神輿輪田御崎へみゆきなり給ける  
に上人臨終ちかつき給よし聞へけれハ  
神主今一度最後の見参に入らむとて  
神輿を離奉てかくなむまうてたる  
よし申入れは聖の詞に符合し  
ける間不思議の思を成して大明神

のいらせ給たるにこそとて此由申たり  
けるに上人見参ありて十念授給神主  
今生の面拜只今はかりなりとて  
落涙す念仏の外余言なしと  
く／＼といはれければ泣立ぬ已に  
臨終近付給とて諸人群集しけるニ  
今日にてハあるまし夜に入て終へき  
よしいひいたされければ人々すこ  
こしつまりにけりさて夜漸く  
あけて同廿三日辰始晨朝の阿弥  
陀経の終るとひとしく禪定に入るか  
如くして往生し給ぬ諸人更にこれを  
しらす念仏結願の後他阿弥陀仏  
阿弥陀経を始給たりける時こそはや  
御臨終としりて声々になきかなし  
みけれ于時春秋五十一嗚呼禪容  
去ていつくにかある只思を西刹蓮  
台の夕の雲にかく慈訓とゝまりてや  
む時なし屢涙を東城草庵の暁  
の露にそふさても時衆并に結縁衆  
の中に前の海に身をなぐるもの六  
人なり身命をすてゝ知識をしたふ  
こゝろさし半座の契同生の縁豈空  
しからむや遠く釈尊化縁尽て無  
余円寂に歸し給し時を思やれば  
十地究竟の菩薩も涙を袖の上に  
流し三明漏尽の羅漢も魂を胸の  
中に消す賢聖猶しかり況や凡夫  
をや緑松風すさましくして夜の声  
沙羅双樹の悲を伝へ蒼海月明  
にして暁の浪抜提金河の愁を摸  
す仏日已に隠て闇に迷ひ法燈永く  
消て道を失へることし各南浮の  
再会空く隔りぬれば互に西刹の  
同生をたのむはかりにてこゝかしこに  
なきかなしみけるありさま詞の林  
を尋ね筆のうみをくみてもいひ  
つくしかたくこそ侍りけれ

### (巻第五上)

#### 第一段

さて遺弟等知識にをくれ

奉りぬる上は速に念仏して  
臨終すへしとて丹生山へ分  
入ぬ林下に草の枕をむすひ  
叢辺に苔の庭をまうけて  
ゆふへの雲に臥し暁の露  
におきてハたゝ上人恋慕の  
涙をのミそ流しけるかくて山  
をこえ谷を隔て或所に寺あり  
仏閣零落して蘿苔礎を埋ミ  
寺院破壊して荆棘路を  
塞く此処にて暫念仏しけるに  
賤き樵夫も供養をのへ幼き  
牧童の発心するもあり又此山  
のふもと栗河といふ所の領主  
なる人詣て念仏請奉らむと  
申けるを他阿弥陀仏曰聖ハ已  
に臨終し給ぬ我等はいまた  
利益衆生に向たらハこそと仰  
られけるをかやうに縁を結奉  
へきものゝ侍るうへは只給らむ  
と頻に所望しける間始て念仏の  
算を賜ぬ此堂を極楽浄土寺  
といひける所から不思議にそ侍る  
さて如此化導ありぬへからんには  
徒に死ても何の詮かあるへき  
故聖の金言も耳の底に留り  
侍れば化度利生し給にこそと  
て他阿弥陀仏を知識として立  
出にけり此聖ハ眼に重瞳浮て  
織芥の隔なく面に柔和を備  
て慈悲の色深し応供の徳至て  
村里盛なる市をなし利益  
をのつから用をほとこして国土  
あまねく帰伏するありさま  
誠に権化の人ならてハかゝる  
不思議ハありかたかるへき事にや

## 第二段

正応三年夏機縁にまかせて  
越前国府へ入賜に当国惣  
社より召請ありける間七日  
参籠して今南東といふ所へ

立給へきにてはむへりけるに  
神殿に哥あり

あすよりはたれにとはまし  
のりのみちゆふしてかけて  
やらしとそおもふ

御宝殿の中なとへはたやすく  
人のよる事も侍らぬにかゝる  
不思議の侍るハ疑なく権現の  
しめしたまふにこそとて

神主頼基披露し侍けり

さて聖ハ今南東へうつり給  
けるに国府の在家人或時靈  
夢をみる権現とおほえさせ給  
て束帯たゝしき人の二三十  
人許社頭を出賜を夢心地  
に是は聖の迎にいてさせ給と  
おほえてゆめさめにけり其後  
いくほとなくて彼所の直人等  
請し奉間重て参詣給神  
慮もさこそ納受あるらめと  
夢想のつけおもひあはせられ  
て貴そ侍へる

## 第三段

其後佐々生瓜生などいふ所に  
修行して念仏すゝめたまふ  
ほとに夏過ぎ秋くれぬれば  
玄冬漸迫来て深雪路を  
うつミ青陽すてに隣をし  
めて寒風こすえを払ほとなる  
に又惣社より召請ありける  
あひた其歳の別時は彼社壇  
にして修せられけり焼香匂  
絶されは沈麝薫を讓て煙  
松孺に芬郁し供華粧鮮  
なれば曼陀かさりをうつして  
風廟堂に繽紛たりさて神主ハ  
正面にして七日の間結縁し  
侍るに明神とおほえさせ給て長  
二尺はかりなる小冠束帯たゝ  
しくして神主か左右の肩をふ  
みて立給へり諸人まのあたり

これを拝す上人を加護し  
法味を喰受し給よとありかたく  
貴そ侍る凡毎年歳末七日  
夜の間はあかつきことに水を  
あみ一食定齋にて在家出  
家をいはす常座合掌して  
一向称名の行間断なく番張を  
定て時香一二寸をすくさす  
面々に臨終の儀式を表せられ  
けるは月日空くうつりきて  
露の命もきゆることはりの  
至極するところを行しあら  
はされけるなるへしいとあは  
れにそきこえ侍

#### 別時結願のゝち

のとかなるみつにはいろも  
なきものをかせのすかたや  
なみとみゆらん  
をはりまつこゝろは声に  
いてにけりくちにほとけの  
名こそきこゆれ

### (巻第五下)

#### 第一段

同四年八月加賀国今湊といふ所  
にて小山律師なにかしとかやいへる  
人僮僕あまた引具て道場へ  
詣ぬ此人ハ罪業をおそれす悪事  
にはゝからず破戒無慚にして邪見  
放逸なりいかゝふるまはんすらんと  
諸人目もあやに思あえるに日來の  
気色にはいとかはりて詞も出さゝ  
りければこはいかにとみえけるに飯を  
捧てあの御房これなれといは  
れけるをかしこまり恐たる  
躰にて請取てくひたりけるそ  
始なりける十念うけ法門聴  
聞して後ハ悪行悉く正て一向  
専修の行者となりけるか齢已に  
たけて所勞付侍りぬ明医湯藥  
をほとこせとも生死の業病はいや  
しかたく従類筋力を尽せとも

無常の殺鬼ハふせきかたしつ  
ゐに臨終正念にして往生の素懷  
をそ遂にける紅蓮の冬の氷ハ心水  
より結といへとも名号の智火これを  
消し劍樹秋霜ハ罪根より積  
といへとも撰取の光明これを滅す  
如此のたくひ聖の教化に預て  
往生をしける人其数をし  
らすとそ

なもあみたほとけの身とは  
こくらくのはちすのはなの  
ひらけてそなる

#### 第二段

さて藤塚といふ所に暫逗留あ  
りて立給はむとしける其日の  
夕より雲くもり風あらけて雨  
夜もすからふりて朝ハ空さり  
けなく晴にけれハ宮腰へ越給  
に小河といふ名のみして岩高く  
瀬早き大河あり水のおもおひたゝ  
しくまさりてかちよりハこゆへう  
もあらぬけしき也疥癩のた  
くひ種々の方便を廻して旅  
人をわたさんとしけるに其辺  
の住人等又舟をかまへて我わた  
さんといひあらそふ程に旅人等兩  
岸にそ徒にたてりけるさて一  
方より聖を渡し奉覽といひける  
に聖曰あらそひいまたしつまらざらん  
にハわたさるへきにあらすこゝに  
て又日をくらすえきにもあら  
ねはこれこそ最後にて侍らめとて  
聖の腰に縄を付て道俗時衆をのく  
取付てそ渡りける上人を始め  
同音に念仏する声雲にひゝき  
浪にとゝろく許也而に青天高  
晴て紫雲なゝめにそひけり不動  
尊多門天碧落の雲に透て  
蒼溟の波にうつろひ給とみえし  
ほとに洪水すみやかに浅瀬に  
成てやすらかにそ渡付賜にける

即藤塚石立なといふ所々の  
人多く耳目を驚しけるとなん  
昔仁寿年中智証大師入唐の

時龍頭の舟を艤ひ鼈波に纏を

ときて万里の煙浪を凌給しに

暴風にはなたれてはからざるに

流球国に打寄られ給へり異類

むらかりあつまりて同法伴侶たち

まちにあやまたれなんとす爰和尚

蜜印に住して懇祈をこらし

給によりて黄色の明王白髪のお翁〔新羅大明神〕

船の舳に現して悪風をとゝむ

とみえたり彼ハ上古の事なれば

いふに及はず代すえにくたりて

かゝる奇瑞を頭給事有難

そおほえ侍る

或時結給頌曰

願力道不嫌余念 西方信無有雜乱

名号外不求臨終 称念内即遂往生

忘無所住而生其心

またてみるすかたはかりや有明の

月にわかれぬなこりなるへき

又よみたまひける

やまのはに心の月をさきたてゝ

老のすかたそにしにかたふく

### (巻第六上)

第一段

或所にて聖道門の学生とて聖の

化導に難をくはへけるハ円頓速疾

の妙行ハ実相開会の真門他力

本願の称名ハ爾前方便の権教

なり豈伽耶を離て寂光あらん

や何穢土を厭て淨刹を願へき

方便と真実と比校に及はずと申

けれハ聖曰一代半滿の教法ハ三

乗漸頓の根機其益を蒙事を

いて論せず但機教時そむけハ修

しかたく入難しといへり今往生

淨土の教門ハ正為凡夫を面として

愚薄底下の衆生を隔事なく五逆

闡提の我等を簡はされハ六八の

弘誓を仰き果地の仏智に帰命

して三世を南無の当念にきる故に

淨土として願へき所もあり煩惱と

して断すへき謂もありされハ凡を

捨て聖を期し身心の迷暗を領解

し沈淪の苦器を悲て無有出離

之縁の心の底をありのまゝに知て

機の功を用る事なく他力易往

の淨刹に生せんとおもひて口を開て

南無阿弥陀仏と唱るはかりなり

故に妙宗抄云非厭離者捨此無

期非欣求者生彼無道自始初心

終至等覺變易未尽厭欣難

忘文然則淨土を求め穢土を厭ひ

凡聖の差別を置いて機方を論す

れば尤隔歴ともいひ方便ともいひ

つへし但其機の所帰をいへは遇

仏超越の導師智斷具足の果

徳なり師と位ことなれ八十地等

覺のうかゝふへきにあらす三

乗淺智のはかるへき事なければ

唯仏一人究竟無生といへり自囑

分の妙解は面々にゆるすへし

いへとも仏智果海の証ハ遙に

隔るをや初地の菩薩猶二地の

菩薩の拳足下足をしらするか如

し而十劫正覺の昔平等の慈悲に

催されて十方衆生をへたてなく

入るに諸仏擯奇の凡夫をもて可

発とし給故に貪瞋具足妄愛の

心の底に纔に一念帰命する時

身心我にあらす弥陀と一致に成ぬ

れハ彼此三業の謂れ成して行往

坐臥即弥陀の四威儀なり仏と

衆生と一なりかへり迷も悟も二

なきものなりされは法照禪師ハ

欲識西方求淨土会是塵中不

染塵ともいひ念即無念仏不二門

声即無声第一義とも云へり此

上ハ終日に念仏するも即無念の

功能を具し終夜生を願も即無

生の益を得れハ見生の火自然に

滅する称名の力なれハ情をもて  
修入する事今の教の不思議に  
あらずや身ハ芭蕉泡沫に似たり命ハ  
電光朝露のとし須臾に生滅  
し刹那に離散す何そいまの一念  
より外に命を遠く持て未来を  
期すへき唯恒願一切臨終時と心  
得て南無阿弥陀仏と唱て後念  
の心を用さるなり古人云光陰可惜  
時不待人と此言実哉我等か本分自  
己の心に如々含識を兼て塵々法  
界を隔事なければとも客塵煩惱  
に障導せられて自他彼此の情量を  
分別す此故に聖教量をもて法門を  
いふと菩提心の上に仏法を談すると  
心大にかはれるものなり是以般舟讚  
云口説事空心行怨是非人我如  
山岳如此之人不可近々即輪廻長  
劫苦といへり名利身を養ひ恩  
愛心をなやましなから清淨の法軌  
にをいて相応し侍らむや天台尺に  
ハ此法は高勝なる者にハ高勝な  
れとも卑劣の者には卑劣なるへしと  
みえたり宗家ハ若導此同諸仏  
国何因六道同生死と尺賜へり道  
念なくしてのさとり法門仏知見こ  
そはつかしけれなど返答ありけれハ  
理を得けるにや淨土門に入にける  
とそ又或僧念仏に難を加て我そ  
いき仏なれわかことくあれといふ  
よし人の申ければ

聖

ゆめのうちに夢こそなけれおとろかぬ  
心はいかてゆめとしるへき  
仏そとなものハあやしほとけには  
ほとけとおもふ心あるかは  
いきなから仏のみちハなきものを  
なもあミたふのこゑにうまれよ

## 第二段

同五年秋のころ或人召請し奉  
ける間又越前国惣社へ参詣あ

り国中の帰依尊卑首を傾すと  
いふ事なし而に平泉寺法師等  
偏執して国中を追出すへしとて  
数百人の勢を引率して府中へ  
赴よし粗聞へけれハ結縁衆等申  
云左右なくをしよせて狼藉を  
いたさんにをきてハたかひに  
雌雄を決すへきよし各憤り侍け  
るを聖諫曰此事にをいていさゝか  
なりとも喧嘩をも引出し給ハ  
なく師弟の契約を変すへし  
在家の人をこそ引導すへき身  
なれ在家にたすけらるへき謂れ侍  
らすもとより衆生にあたへぬる身  
命なれハ善惡につけて他に  
まかする上はいまさらうちころ  
されしとおもふへきにあらず六道  
四生二十五有に流転する事は  
唯身命をおしミしゆえなりしかれば  
煩惱具足の依鉢をうちそむせら  
れは無始以来のかたきをとりすま  
したるなるへしゆめく憤給へ  
からず又日来申つる法門たゝいま  
行し踵してみせ奉らんなど再三  
いさめられければ知識の命を背  
かんことをおそれて掌をあはせて  
念仏する程に衆徒等是非を  
いはす社壇をうちかこみて時を  
つくり廻廊の中へ責入て飛礮  
を打事しけきあめのことくなり  
けれども時衆一人にもあたらす  
かくて半時はかりにも成ぬらむと  
思ほとに念仏の声も絶す合掌の  
手もみたれさりけれハ衆徒等力  
をよはすして帰けるか又議ていはく  
せむするところ聖をとりたていたせ  
とて重てうち入つゝ求奉るに肩  
をおさへ膝をふみてすくるやか  
らもありけれどもつゝにみつけ  
たてまつらてむなしく引退て神主  
かもとへ使者を立て此聖宮中を  
追出せすは神宝をふり罪科

に処すへきよしいひつかはし侍りとして神主歎申けれハさてはいとやすき事なりとて其夜亥剋はかりに社家を立出て加州へおもむきたまひにけり不惜身命のことはりをまのあたり行しあらはされける事貴そおほえ侍つる

(巻第六下)

第一段

永仁五年の比上野国を修行ありけるに或所にて武勇を業とするをのこ一人来て時衆に入へきよしいひけれハ聖曰出家者亡身捨命断欲帰真心若金剛等同円鏡怖求仏地即弘益自他若非絶離囂塵此徳無由可証と和尚尺したまひたれハ先能々道心おこりて後のはからひなるへし頭をそるものは千万あれとも心をそるものハ一両も侍らす在家者貪求五欲相続是常縦発清心猶画水とみえたり超世の悲願ハもとより有智無智を論せず在家出家をいはすひとしく往生すへき願なれば必ずしも家を出て山林に跡を隠し身をすてゝ幽閑のすまひせよとはいかゝ勸侍へきたゝいつくにも念仏たに申給ハそれぞ往生の業にて侍へき中く出家して戒をもたもち貴けになりぬれはいかにも機の徳かおもてとなるほかに仏をもたのます他力にも帰せずして往生をとけぬ事の多く侍なり凡法師も尼も此身のために同道する事侍らす念仏を申て昼夜にをとるも故聖踊躍歡喜の余にをのつから行し始給たりしかハ今も其跡をたかふへからすとおもふばかりなり行住坐臥時処諸縁をきらハねハたゝ念仏こそ詮なれこの

時衆に入るものハ今身より未來際をつくして身命を知識に譲り此衆中にて永く命をほろほすへし若此下をも出て制戒をも破らハ今生にては白癩黒癩となりて後生にハ阿弥陀仏の四十八願にもれ三悪道に墮てなかくうかふへからすとちかひをなし金をうちて入といへとも適も無道心の輩ありて制戒をも破りぬれハ逆罪のものとなりて三世の諸仏の舌をきり二世の願望を空すまことに曠劫の流転ハ併此身命を扶持せる故也をのつから世をのかれ身をすつるものも六賊に随逐して法財を失ひ五欲に貪著して諸悪をたくはふこれハ力なき凡界のふるき習なれば我と制断する事叶かたき問いきながら死て身命を知識にゆつり心の所望をかなへすして永用事を尽す我を我にせされハ居を他所にうつさす心を心と用されハおもひを万事に叶えす是則他力に帰する至極をあらはし三心を事相に振舞へる色なりかゝる甚深の謂ある間おほるけの発心ならてはかなひかたきによりて時衆に入事をゆるし侍らす出家してつらなる中にも心ハ道場に住せぬ者も侍らむ在家の人の信心あるこそ身は聚落にありといへとも心ハ道場に住したるいはれにて侍れとのたまはせければことほりをえけるにや出家ハおもひ留にけりさて家に歸りて後ハ一すちに念仏して殊勝の往生をとけゝるとそきこえし

二河白道の心にて

火とみつとなみとほのほをわけてよふ  
ちかひのふねそなもあみた仏

玄義心

やまのはにほのめく月をまつほとそ

木の下やみはさもあらはあれ  
煩惱即菩提

わきてみる月そ光ハてりくもる  
雲ハくもにはさはらさりけり

## 第二段

同年六月下野国小山新善光寺  
の如来堂に暫逗留ありけるに瑞華

ふり紫雲たなひきて耳目を驚し  
けれハ万人奇特の事に申あへりけるに  
或僧のもとより書て送ける

夫正仏法のをきて空花ハあるに似  
たれとも躰ハなし唯是目の病の  
故によしなく大虚を華とみるなり  
青赤目にある時ハ空寂静也并に藕  
脾膜を去時ハ一空寂静也并に藕  
の糸とみる事うちやる詩の詞にも  
遊絲繚乱碧羅天といふ歟忝く

一向浄心の御念仏をよそより妄  
見をもて異見異解を生ずる歟  
是全く偏執我々のおもひに非ず仏  
知見の所推自他其情を截断して  
御行化を正に歸し奉らむとなり  
必一句をしめし給ハ結縁の資糧に  
そなへむと請ふ

おほ空にはなちりまよひあそふいと々  
みるはみたりの心なるへし  
一すちにのりはやめたるこ々ろこま  
そらにみたるゝいとやつなかむ  
はなもみすいともみたれぬ心をは  
をのれなりとやいふへかるらむ

返し 聖

おほそらはもとよりはなもいともなし  
むねのはちすやみたれちる覽  
心こまのりはやめたる一すちや  
いと々なりてもつなきとむへき  
はなもみすいともみたれぬ心にハ  
わきてをのれとなにをかハしる  
一翳眼にあれは千華乱れちると  
いへるめの病によりて虚空を花とミ  
る誠に躰相都無の妄見なり但驚  
峯演説の筵鶴林泥洹の砌には

諸天悉く花を散しき又聖徳太子  
勝鬘経を講給しかハ妙華一夜の  
間にふりつもりき此も目の病に  
よりにて空花をみるといふへきかこと

さら称名行者の前に紫雲瑞花を  
見事尤故あり阿弥陀仏因位に願  
を發給し時妙花をふらし

音楽を奏せし是則十方衆生の  
往生決定する願躰剋果の瑞相也別

願の正覚ハ凡夫の称名より成し衆生の  
往生ハ弥陀の正覚に定畢依之衆生  
称念の今と本願成就の昔とま

たく二なし然者一念即十劫々々即  
一念也又をのつから信心より感じ  
て加様の靈異をみる時娑婆の  
著心を翻して浄土の勝相に

おもひをかくる若是仏智の方便歟  
凡夫の度量する所にあらざる  
ものなり

## 第三段

或人恩愛は身を損するかたき  
財宝は心をなやます毒としり  
なからいとほさるハ仏法にあへる  
其かひなく覚侍るよし歎申けれハ  
書てつかはされける

妻子財宝ハ身心をなやますかた  
きそとしりぬれハ心に厭捨らるゝ  
上著せらるれば弥心得られて  
うとまるゝ間今生より思捨たる謂  
にてこそ侍れ而に今生にては叶  
かたきとは心得られぬ事也今生  
より外に後生なし今の念仏より  
外に又臨終あるへからす此領解立ぬる  
行者ハ今生後生臨終平生二な

くして心も安穩になり此上に厭  
離穢土の心も欣求浄土の心も善心  
も悪心もひまなけれとも南無阿弥  
陀仏と唱ていつれをも用ゐされは  
臨終の一念に往生疑なき者也

越後国木津入道といふ人物語の  
次に世間の風俗ハいとほしく覺へ

山家の幽居ハ気味深くのみ侍へる  
この心ハいかゝ侍へきと申けれハ  
書てあたえられける

栄華貪名利故 後生必墮惡道  
徒然離欲染故 当来速証仏果

(巻第七上)

第一段

同六年武州村岡にして所勞つ  
きて臨終したまふへかりける  
時々衆のために書給教誡云

他阿弥陀仏同行用心大綱

厭捨草庵 不惜露命 守出家心  
不帰在家 不軽神明 帰敬三宝  
恒墮地獄 誓永不破 信人為伴  
謗人不背 道理任他 僻事領納  
命軽如塵 不延臨終 称名憑生  
心有深信 身敬礼仏 口常念仏  
付出家機念仏行者本願唯

南無阿弥陀仏

或人三業のほかの念仏とて心  
をはなれよと教化したまふ心  
えられず松嶋見仏上人の  
哥にも

心よりほかにハのりの  
ふねもなししらねハしつミ  
しれはうかひぬ  
とこそ侍けれと申けれハ

聖

心より外にそのりの  
ふねハあるしらぬもしつむ  
しるもうかはす

第二段

越中国放生津にて南条九郎と  
いひける人まうてゝ申ていはく御  
房の念仏すゝめてあまねく  
往生せさせたまふと申ハ我  
等かやうなる罪人をも仏に成  
したまふへきかと申けれハ人に  
よるへきにあらず本願に帰し  
て念仏申たまはゝうたかひやハ

あるへきとのたまひけれハいさ  
とよ貴とき人のおほせられしハ  
まさしく仏になる事はお

ほろけにてハかなひかたきよし  
のたまひきいかゝあらんと申ける  
をまことに末世の根機造惡の

凡夫出離にきてハたゝ弥陀  
一仏の大悲本願に乗せず

よりほかハおほかたかなふへからず  
これによりて阿弥陀仏の法蔵  
菩薩たりし時ちかひてのたま

はく若我成仏せむに十方衆  
生我名号を称て下十声に至

らむに若生れすといはゝ正覚を  
とらしとかの仏今現に成仏し  
たまへりしるへし本誓重く

悲願空しからす名字を称せむも  
のかならず往生すへしといふことを  
たれも煩惱のこきうすきをい

す罪障の軽き重を論せずたゝ  
口に南無阿弥陀仏とゝなふれハ  
声すなはち往生也中〳〵才学

たつる人ハ教訓にかゝはらぬかたも  
ありをの〳〵のやうなる重代の  
武士のいのちをかるくもち給へる

か往生はやすくとけたまふへき  
なりとしめされけれハさては  
往生のいはれハ心へはむへりぬいか

なる妄念のうゑにも名号をと  
なへて往生をハ仏にまかせたて  
まつるへきかとこたえけれハせん

あくにつけて心をもちいさるを  
他力の念仏とハ申なりといはれ  
けれはこの人二心なき念仏者に

なりけるとかや

ある時よみ給

をくるまのわつかに人とめ  
くりきて心をやれは  
みつのふるみち

いくとせにもなかれてき  
ゆる山かはのあはれはかなき  
おいのなみかな

身をおもふ人のこゝろの  
やみちこそくらきより猶  
くらきにはいれ

### 第三段

越後国池のなにかしとかやいふ  
人年来密教に心をかけ舍利に  
信をおこしてすくしけるか  
宿習うちに薰し往縁ほかに  
熟しけるにや聖に直面して  
今度の出離をきてハ他力  
本願に乗せずより外はかなひ  
かたきことほりにおもひなりてま  
ことの知識にあひたてまつりぬる  
事をよろこひ侍けるか聖より  
十念をすゝめられ奉るよし夢想  
に見て後念仏往生の安心に  
もとつきて弥信心をいたしけるに  
風気あひをかして旦暮期し  
かたし福祿年積て雪のはたへ漸く  
衰へ心神例にそむきて露の命  
きえなんとす生前の対面は夢後の  
利益に覚て聖のおはする所へ  
まうてゝ見参に入て帰ける後所  
労ことさら増氣す聊まどろみ  
たりけるに聖の弟子たちあまた  
来て十念すゝめて看病すと覚けれハ  
あせなかれ出て病惱ことくく平  
愈してけりいと不思議なりける  
事にやこの人つゐに臨終しけるに  
めてたく往生をとけゝるとなむ

### 第四段

同国鵜河庄萩崎極楽寺に僧あり  
契範円觀房とそいひける住山の昔  
より隠居の今にいたるまで修学年を  
重ね練行日積れり九枝燈尽ぬれハ  
窓の螢をあつめて学をたしなミ八旬齡  
闌たれば眉に霜をたれて觀をこら  
すしかるに聖柏崎に逗留のよし伝聞て  
帰依の志ありける間已に道場へ参詣  
すへきよし申を数輩の門弟等諫云貴

辺ハさすか国中の碩学無双の能化にて  
おはしますにかゝる捨聖のもとへ來臨  
して法談などあらは人もあさくし  
くや思侍覽といひけるを此聖ハ数百  
人の徒衆をひきゐて利益遍き人にて  
おはしませは定て行徳もおはすらん  
予相伝の深義已証の法門委く尋  
申さんにこたえたかへ給はすハ速に  
知識とたのミ奉るへし若御房達  
所存に違して思給ハ永く師弟の  
礼あるへからすといひける間弟子等  
力及はず相伴て道場にいたりにけり  
さて聖に見参して法門尋奉けるに  
自宗の奥義をきはめ觀道の得解を  
あきらむるのミにあらす他力本願の  
安心にもとつきてなめならず恭敬  
しける間弟子ともの中にもあまた  
時衆に入けるとかや此人幾ほとなくて  
終けるに殊勝の往生をとけゝるとなん

### (巻第七下)

#### 第一段

さて越後国府より関の山熊坂に  
かゝりて信州へ趣給山路に日暮ぬ  
れは弘苔て露に臥す交語者ハ  
樵歌牧笛の声潤戸に天明ぬれハ  
梢を分て雲をふむまなこに  
遮るものは竹煙松霧の色おほ  
よそ視聴にふるゝ所厭離の  
おもひをすゝめ欣求の心を催さすと  
いふことなしかくて善光寺に詣給  
たれハ式日の外ハまれにもつとめら  
れざる舍利会臨時にをこなはれて  
御戸ひらかれたり是併如来の  
慈悲方便にてこそまします覽  
とて寺家より日中の行法ハ礼堂  
にてあるへきよし申請られけれハ  
如来前にしてつとめたまへり  
昔よりいまたかゝる例なしとて万人  
首をそかたふけゝる此如来ハ天竺の  
靈仏として日域の本尊と成  
給へり酬因の來迎を示して影向

を東土の境にたれ有縁の帰依を  
願して靈場を信州の中にしめ給  
一光三尊の形像如来の密意を表  
し決定往生の勝地他方の淨刹に  
超たり今宿縁浅からざるによりて  
あひ奉る事をえたりとて七日參籠  
ありけるに日中の念仏ハ毎日に御前の  
舞台にして被勤けり彼聖德太子  
用明天皇の御為に七日御念仏  
あるよし如来へ啓給ける其詞曰  
七日称揚功德已 斯此為報広大恩  
仰願本師弥陀尊 助我濟度常護念  
如来御返報云  
一日称揚猶無止 何況七日大功德  
我待衆生心無隙 汝能濟度豈不護  
とそあそはされたりける今七日の  
參籠もおもひあはせられていと  
あはれにおほえ侍れり

## 第二段

甲斐国一条のなにかしとかやいふ  
人尋申二本二百数珠にて侍りし  
時は時剋ハみしかく数ハおほく此百  
八にては時剋は久くかすハすくなく  
侍へり本の数遍のことく侍へきか  
かすはすくなくとも時分の久きにつ  
き侍へきかと申たりけるに  
数遍ハ数遍のためにあらず相統の  
ため相統ハ相統のためにあらず臨終  
一念のため臨終一念ハ臨終一念の  
ためにあらず往生のため臨終一  
念の往生は南無阿弥陀仏  
同国中河といふ所にて或人聖にそひ  
奉る程ハ念仏の安心も心得侍るや  
うなれとも立離れたてまつれハ  
法門のことはりも念仏の要心もうち  
わすれ侍れば聊注給らむと申けるに  
往生極樂之直道ハ弘願称名之一  
行也而水上の泡草の葉の露よりも  
あたにはかなき身のために消やすく  
かりそめなる命をなかく思なして  
妻子財宝の愛念妄執にふかく貪

着し永餓鬼々畜のすかたとなりて  
苦をうく此心のためにたくはふる所の  
所領財色によりて煩出来れハ心に  
背く時ハ是非なく怨敵の憤をむすひ  
放逸邪見の業行を造て多生曠劫  
八寒八熱の炎にむせひ氷にとちられて  
なかくうかひかた生まれに供仏施僧の  
営をなし堂舎塔婆を建ても名  
聞利養の心をおこして修羅鬪諍の  
業と成す又五戒十戒を持て身口  
はかりハマほるといへとも意地みたれ  
ぬれハ人天有漏の果福となりて大  
乘無作の戒躰にあらずしかる間  
衆生の心行よりまれにも三界六道  
をいつるたよりなし適出家発心して  
山野村里に身命を捨てゝ修行すと  
いへとも風雨寒熱にたえず衣食の為に  
わつらふ間もとの業因に立還て三宝  
仏陀を背き無慚のとかをうく或は  
遁世と名つけて閑居に菴をむすひ  
心静に念仏すといへとも若命な  
からふれハ徒然にたえすたえたる  
人も心のゝとかなるをよろこふほとに  
終焉命断の刻苦痛をうくる時  
心顛倒すれハ所存違て念仏するに  
あたはずむなしく死して往生の  
本意を失ふ悲哉まれに念仏の  
知識にあふといへとも或ハ戒行を  
またくしてこそといひ或ハ悪業くる  
しからすとをしへ或ハ無念にして  
唱へよと示し或ハ極樂に心をかけすハ  
かなふへからすとすゝむ然間三業四威  
儀善悪の心振舞にとゝまりて  
阿弥陀仏の本願にも背き善導  
和尚の疏尺にも違て近來念仏すと  
いへとも誠に往生の本望を遂る人  
まれなり所詮往生決定の念仏の  
行者ハ在家出家をもちはず智者  
愚者にもよらず善人悪人をも  
えらはす心の乱不乱をも論せず  
老少不定の命なれハ旦暮知かた  
し三界火宅難居止乘仏願力

往西方と心得て死の縁まち／＼  
なれは何そ只今の臨終をのへむや  
凡夫の心はつたなけれハまことに  
今しぬへしとはおほえすともいつる  
息入るをまたされハ行往坐臥時  
処諸縁の間に必しぬることほりの  
至極する上ハ在家ハ在家ながら  
出家ハ出家ながら智者ハ智者ながら  
愚者ハ愚者ながら善人ハ善人な  
から悪人は悪人ながら心の乱れむ  
時ものとかならん時も極楽の念せら  
れんときも念せられさらむ時も  
病中にも平生にも善心の上にも  
悪心の上にもたゞ称名の声を  
往生と信して南無阿弥陀仏と  
唱て露の命尽ぬれハ名号の中  
より必仏の来迎も極楽浄土も  
あらはるへきなり南無阿弥陀仏

中川におはしける時

聖

ゆくすゑも今もむかしもむなしとも  
いひつくすへきことのはもなし  
身をおもふ心の中をたかへすは  
みには心そあたとなるへき  
なけなき心を身にはもとむとて  
身のくるしめハなけきとそなる  
身のためによしなく物をおもふ哉  
人めをつゝみしのふ心は  
をしふるにしられぬかたハのりの道  
ほとけのちゑにをよひかたくて  
をしへぬにしられぬわさはむへのみちに  
たちかへるへき心ふるまひ  
よしあしのことのはことをくつゆの  
いのちのきゆる御名の一こゑ  
うかひかたき心をしればもらさしと  
ちかふほとけの御名そうれしき

(巻第八上)

第一段

同国小笠原といふ所におはしける  
時日蓮か門弟等念仏勸進無  
謂とて道場へ乱入して云一代の

教法には法華をもて本懐とし  
五時の配立には妙法をあげて醍  
醐にたとふ而に爾前権門の念仏を  
もて正因正行と名け速疾頓成  
の妙宗をもて雑修雜行と下す  
誹謗大乘のとか遁所なし仍今  
祖師と号する善導法然等無間  
に墮在す先祖猶しかり況末資  
をやといひて事を法門に寄て狼  
藉を引出へき気色みえける間  
委細の返答に及はず善導法然  
地獄に墮らるゝよしの事さも侍  
らむ如溺水之人急須救といへり地  
獄に入て勤苦の衆生をたすくるは  
是大悲闡提のちかひなりとこたへ  
給に全利生の為に非す大乘誹謗  
の故なりと重て難する間汝誹謗  
の罪に依て墮たりと心得たらむに  
よりて彼人地獄に墮すへきに非す  
おちたりと心得たらは汝か心の中の  
善導法然はさこそあるらめとの  
給ければ是非をいはすへからすとて  
押寄る処に在家人あまた立ふ  
さかる中にときはのなにかしとかや  
いふもの進出て云在々所々の利益  
これに限へからず遺恨あらはいつ  
くにも謝し奉へしさうなくこゝ  
にて狼藉を致さは一身の恥辱  
万人の嘲哂也適逢かたき知識  
に逢事をえたり名聞利養の  
昔ハ心は恩の為につかはれ命ハ義  
に依て軽かりき欣求浄土の今は  
心を本願にかけて命を知識に奉る  
なといひしろふ程に刃をましへほこ  
さきをあらそふへかりける間聖両  
方の中に分入て云仏法といふハ互に  
自他を忘れ人我を離て談する  
事也各のけしきあしくみえ侍り  
不審相貽は後日に來給へ今日ハ速  
に帰らるへしとうちわらひての給  
ければ偏執をたおし慢心とらけゝ  
るにや日蓮か門弟等引退て事故

なくしつまりにけり若雌雄を決  
し是非をあらそはましかはゆゝしき  
人の大事ならましを身命を顧  
すなためられければにやことな  
る子細もなくしつまりにけりいと  
不思議なりける事にや

## 第二段

同国板垣入道といふ人聖に对面あり  
けるに念仏の法門領解して当国修  
行の間は常に値遇し奉りけりさて  
国中利益の後御坂にかゝりて相州へ  
趣給此山は名をえたる嶮路余にこ  
えたる難所也青巖峯遠して  
雲旅人の衣をうつみ白霧山深し  
て露行客の袖をうるをす而に彼人  
年齢已に傾て首の霜をはらひむそ  
ちのさかをこえて聖を送奉けむ懇  
志の至いとあはれにこそ侍れ聖いた  
はしくや思はれけむ乗馬すへき由  
度々の給せけれども知識の歩行  
にておはするにいかゝ馬にはのるへきとし  
おいおとろへ侍れはおしむともかひある  
へき身にもあらずたゝかちよりこそとて  
其日は河口といふ所までつきぬ老耄の  
身なれハ余年もいくはくならず後会  
又其期をしらす今生の面拝も是を  
かきりとかなしみけるいとことほりに  
こそ侍れさて夜あけゝれは立給にたも  
とにとりつきておさなきものゝ母をした  
ふかことく声を立てなきかなしみけれ  
いかにこゝろなきも袖をしほらぬたくひ  
はなかりけるとそ家を出て世をのかれさら  
むほとはかくてしもあるへきならねは  
たゝいつくにても往生をとけ給はむ  
のみこそ本意なるへけれとて子息  
ともあまたありてこゝろならずとり  
かへしけるあひた同生を華開の朝に  
期し再会を終焉の夕にちきりたて  
まつりて泣とゝまりぬさて宿所に帰  
けれともいとこゝろも身にそはずなり  
ゆきけれハ持仏堂に入り聖の真影

にむかひてなみたをなかしつゝ会者  
定離ハ有為無常の境なれハなけ  
くともかひあるへからすどく浄土に  
まいりて不退の友となりたてまつらむと  
て水食をとゝめて一心に念仏す子息  
親類とかくいさめけるをも用ずして  
十一日をへて終に往生を遂にけり或  
は合戦鬪諍の禍にあひ或ハ恩愛離  
別の悲にひかれて命を捨て身をほろ  
ほす是皆輪廻の妄業にしてまた  
く得脱の因縁に非あらずこれハ出離の  
要法を聞き往生の安心をあたへられ  
奉ぬる恩徳を思ひ芳顔をしたひて  
忽ちに思死にしける事ためしすく  
なくこそ侍れ彼雪山童子の身をな  
け常啼菩薩の肝をさきし皆深  
位の大士法身の薩埵の化儀なれば  
申に及はず末世の凡夫にをきてはか  
かる不思議ありかたくこそ侍れ

或時

うゑもなきおもひやきえしふしのねの  
けふりハイまはめにもかゝらす  
くもよりもたかくいてたるふしのねの  
月にへたゝるかけやなからむ

## (巻第八下)

### 第一段

越後国波多岐庄中条七郎藏人  
といへる人正応六年の比聖に对面し  
奉て他力本願の謂念仏往生の安  
心に本付て後分段生死の堺に心を懸  
とゝめす老少不定の理に思を懸  
て所領財宝妻子眷属の愛執著  
心を翻してたゝ後生菩提の営より  
外は他事なかりけるか真の知識二  
逢奉て往生とけ侍覽事永劫を  
経とも争報謝し奉へきとて感涙  
を流しけり其後出家して浄阿弥陀  
仏となむいひけるか所勞付侍けるに  
病中の間或ハ光明をみ或は音  
楽を聞く化仏菩薩尋声到一  
念傾心入宝蓮と唱て諸の菩薩聖

衆達の影向しまし／＼けりとして  
落涙し侍けるにほそらかなる光二  
すち淨阿弥陀仏か頂を照す此時  
掌を合て即紫雲たなひきて紫  
のとほそに立廻といふ讚を頌して  
一心に來迎をまつ苦痛増氣す  
る時は慈悲加祐令心不乱とこそみ  
えたれ我力ならばこそいかなる苦  
痛ありともなとか念仏の申され  
さるへきとて高声念仏百返許  
申ていきたえぬ于時靈光赫奕  
として晴天にかゝやき異香芬郁  
として内外に薰す骨をひろふ  
時又紫瑞空にみえて音楽雲に  
きこゆ骨ハ皆五色にして仏舎  
利の如し願力かきりなければ正  
法末法時を扱事なく機縁空  
しからされは在家出家人を嫌  
事なし往生を遂るもの多し  
といへともけにかゝる靈異ハあり  
かたかるへき事にや

## 第二段

越前国角鹿笥飯〈近來言敦賀氣比〉太神宮は  
大日如來の垂跡仲哀天皇の宗廟なり  
天皇九年異国へ発向せむとし給し時  
於長門国豊浦宮崩御の間神功皇后  
懷妊たりなからつゝに三韓を責平て  
帰朝の後皇后十三年みつから神主と  
なりて祭礼を被始行以來一千余廻  
の星霜旧たりといへとも七十余代の  
崇敬あらたまる事なし北陸幽奇  
の祠壇を祐て華夷静謐の官社に  
そなふ専異国征伐の儀式をもて猶  
本朝鎮護の祭祀とす夏杓秋嘗の  
礼欽仰年旧たり朝祈夕賽の輩  
効驗日新なり靈異の甚き事得  
て称すへからさるもの歎抑此地為躰  
東に翠嶺の嵯峨たるあり朝の日  
利生の光を耀し北に蒼海の渺  
漫たるあり夜の月和光の影をう  
つす是以漁翁の釣をたるゝ蒼浪

万里の雲をかさねてをのつから生  
者必滅のことはりをかたとり遊女  
の棹をうつす煙波千重の霧を  
隔て鎮に会者定離の悲を顕す  
爰正安三年聖当社へ參詣ありける  
に或人靈夢をみる社頭の後の森  
に白鷺〈当社仕者〉数をしらす群集す何  
事そと傍の人に尋るに道をつ  
くらすへき評定也云々加之当社前  
大祝兼盛瑞夢の告を蒙によりて  
西門の道を造て聖にふみ始させ奉  
らむと思侍りけれども社家の一大事  
たやすく人力のをよふへきにあらず  
とて歎なから年月を送よし聞給て  
さてハやすき事にこそと仰られ  
ける間社司神官等大によるこひて先  
繩を引て道のとほりをわりぬ広四  
間あまり遠さ三町余也さてもそのあた  
りはおひたゝしき沼なりければす  
へてうつむへき土のたよりもなかり  
けるを聖社頭より四五町許ゆきて  
浜の沙をはこひ始たまふ程に時衆  
の僧尼我も／＼とそあらそひける其  
外も諸国帰依の人近隣結縁の輩  
貴賤を論せず道俗をいはす神官  
社僧遊君遊女に至るまで七日夜の  
間ハ肩をきしり踵をつけり海浜す  
こふる人倫をなし道路ます／＼市  
の如し加之社頭を掃除し宮中を  
崇敬して沙をちらし石をたゝましめ給  
大方玉をみかき鏡をかけたるかとし聖の  
道徳にあらすはいかてかたやすく此大功を  
なさむやこの間の靈異甚多しといへ  
ともしけきによりてこれをのせさ  
るところなり

## (巻第九上)

### 第一段

正安三年十月のころ伊勢国  
へいり給同十一月の始に櫛田の  
赤御堂に逗留ありけるか此  
次に太神宮へ參詣すへきよし

の給けるを凡当宮は僧尼  
参詣の儀たやすからさる上  
如此遊行多衆の聖宮中へ  
いり給事いまた其例なし且  
は若干の尼衆の中には月  
水等のけかれあるへし又疥  
癩人等つき随奉れり是又  
宮中へいる事禁制あり旁  
憚あるへしなと申輩侍りけれ  
とも追返されむ所までまいる  
へしとて疥癩のたくひをは  
宮河の辺に留置て自余の僧  
尼以下は皆引具て外宮へ詣  
給に敢て制奉る人なしこれ  
によりて中鳥居までまいりて  
十念唱給宮居久く神さひた  
るけしきよの社にすくれ渴仰を  
致し信心を催事他の神に超  
たり昔天巖戸を閉給し時日月  
光みえずして天下とこやみに  
なり侍りしに天津兒屋根尊  
八百万の神たちをあつめて榊の  
枝をとり庭火をたきて夜もす  
から神あそひし給しにめてゝあ  
さくらかへしの時俄に巖戸を開  
給けむいにしへ思出られて貴く  
面白そ侍けるかくて宮中出  
入のともからに念仏を勧給二神  
人等この所の風俗として如此の儀  
いましめられ侍りとて一人も受るもの  
なし爰宮政所大夫雅見といふ  
ものおりふし参宮して下向し  
けるか聖の念仏を勧給御手  
より金色の光其色あさやかにして  
上へ一尺五六寸はかり左右へ一尺七  
八寸はかりみえ給又同じ御手より五  
色の瓔珞二尺はかり玉を貫て動か  
如してたれたり于時雅見奇異の  
思を成して幻といふハかやうの事  
にやと思惟して瞋目をとちて又  
見開になをもとのことし此時掌  
を合せ膝を嘔して十念を受奉

る此後諸人悉く念仏をうけ奉  
けり又一禰宜定行宮中の館に  
ていさゝか居ながら眠たりける夢の  
中に山田の上大路を五体すき  
とほり給へる阿弥陀如来并菩薩  
聖衆百体はかり引烈て黒衣の  
僧少々相交て中鳥居へ向て通  
給とみてすなはち驚て云只今いか  
なる人か参宮し給つると尋ぬる  
にしか／＼の聖こそ大勢にてとお  
り給つれと答るに信伏随喜して殊  
帰依謁仰す其日は法楽舎に  
宿せられけるに宮人等美膳をとゝ  
のへて供給し奉る又次日内宮へ  
詣給御裳洗河に浴水を用て  
漸社壇におもむき給に神風  
久くつたはりて業塵をはらひ  
靈水遠く流て心垢をきよむる  
かとそ覚へたるさて二鳥居にて  
十念唱て下向し給に内宮一禰宜  
申云神の法楽人の結縁の為にとて日  
中の札讀を所望し侍ける二社頭  
は其例なき間道の傍なる芝の上  
にて如例一時念仏あり聴聞の上  
下感涙をおさへて信仰し侍り  
凡外用の仏法に敵する魃魔王ニ  
順して国土を領せむかため内証の  
利生を專にするつゐに群萌を誘  
て仏界に入れむことを欲するものをや  
此事ハ雅見注進状并に一禰宜か夢想  
記とて後日に神宮より上人へ進せ  
られけるとなむ

### (巻第九下)

#### 第一段

同四年春越前国敦賀に又日数  
ををくり給に江州小野社神主実  
信靈夢のつけあるによりて書札  
をたてまつる状に云去正月廿八日夜寅  
刻夢想に当社御宝殿の正面  
の御戸をゝしひらかれたるに金色  
の光明ありて内外赫奕たり御殿

の中よりけたかき御声しての  
給はく諸国修行の念仏勧進

の聖他阿弥陀仏は権化の人なり  
汝かの上人を当社へ召請せよわれ  
結縁すへしと示給間子細を申

入云々仍神託のうへはずみやかに  
請に応すへきよし返事あり

て同三月四日江州へおもむき給ふい

まはみねのあはゆきものこりなき  
ころなれともなを風はあらち

の山かと覚る所をすきて海津の  
浜につきたまひけるに迎にふねを

奉りければやかて九日立給昨日は

北にふきけふは南に送る風帆

の感応しかしなから神の威光を

ほとこして上人を擁護し給ける

にこそさて便宜なりければハ竹生

島へ詣給崎岸高くそひけたる

垂跡感徳の余に超たる事をかた

とり湖水深く湛たる本地弘誓の

浅からさる事を表する者平昔都

良香此嶋へ詣給て眺望の幽奇に

たえず三千世界眼前尽と詠し

て下句を案し煩けるに神殿よ

り十二因縁心中空とつけさせ給

ける事おもひ出られ侍り爰常

住等聖の参詣を感歎して巖

飛などいふ水練してみせ奉りけれ

は人々めつらしき事にそ申あひ

けるかくて霞を分浪を凌て朝妻

につき給ぬ一宿を経て小野社壇

に参詣給き当社は称徳天皇

御宇此所より靈光の瑞ありて

遙に王城を照す仍勅使を被立

て天平神護元年四月中寅に大

菩薩を奉勸請云々さて十余日

参籠の間靈夢以下の奇特数をし

らす其後羽田社におはしける時花ふり

紫雲立しかは諸人随喜せずといふ

事なし小野大菩薩聖を召請給

よし風聞せし程に国中の諸社より

面々に請奉にけりいと不思議なり

けることにや

或時

のかれぬとおもふみやまのおくまでも  
けにはうき世の外ならはこそ

第二段

同国小蔵律師なにかしとかやいふ人

聖に見参して念仏法門領解して

後或時往生浄土の用心いさゝかし

るし給らむと申けれハ書てつか

はされける

三界ハ衆苦の住処身即苦のある

しなり財宝ハ煩惱の所依心又

欲の源なり六道四生の枢を出す

しては争四苦八苦の家をいとはむ

心を花にとゝむれハ名残を木本に

のこしてまたこむ春をまつ輪廻こゝ

に絶す思を月にかくれはおもかけに

夜の雲を厭てとゝまらぬ秋をおし

む妄愛弥深し衆生輪廻の迷は

いつをか始としいつをか終とせむ

生を生のはしめとせむとすれハ生

のはしめにも迷ぬ死を死の終とせ

むとすれハ死のをはりにもくらし

恩愛離別の歎の煙心のうへにお

ほへは愁歎の炎肝をこかすといふ

事なく生死到来の悲の風病の

床にさはけハ無常の刀心をきら

すといふ事なし適穢土を厭離

せむとすれは其体を執して其影

を別むとするか如しいつくにてか

此を離へき山又山の奥までも

ますく浄土を欣求せむとすれは

我身を忘れて我身を求むとする

に似たりいつくにてか是を願得

む西猶西の境までも身ハ水上の泡

の浪に漂よりもたのみなく命は

空中の幻の目をましろかせは空

きか如し不如業障の身命を弥陀

に廻向して本願の名号を唱むにハ

称名念仏の行者をハ六方恒沙

の諸仏も光をならへて護念し

信心決定の人を是天魔波旬も  
いかりを翻して讚嘆すはやく  
一心に念仏して畢命を期と  
すへし

(巻第十上)

第一段

おなしき年八月十五日撰津  
国兵庫島へつき給沙村かさ  
なりてちまたをならへ河海たゝへて  
派をさかふ錢塘三千の宿眼の  
まへにみるかことし范蠡五湖の  
泊心のうちにおもひしらる治承の  
ころ新都を立られし福原の京  
とは此所なり翠華来らすして  
歲月久く積ぬれハ玉の聳むな  
しきあとをのみのこして瓦の松  
其なこりさへなくなりにたり時うつ  
り事あらたまるありさま無常の  
境をいとひ不退の土を願たより  
なるへしさて故上人の御影堂に  
詣て瞻礼したまふに平生のすか  
たにたかはねは在世のむかしおもひ出  
られて懐旧の涙せきあへす十  
念の間称名の声もとゝこほり  
給ほとなれハ時衆の僧尼を始  
として結縁の道俗にいたるまで  
悲歎の涙たもとをうるをし傷嗟  
の声耳にみてりさても今年ハ  
上人十三廻の忌辰なり聖もとより  
念仏弘通をさきとして去留心に  
定めされハ機に随ひ縁に趣て  
勸進し給ほとに其日をさして必しも  
此所へとおもひ給はさりけるに今月  
にしもをのつからめくりつき給へる  
真実報恩の志感応しけりとそ  
のたまひける自然流入薩婆若海  
のことはりもおもひしられて貴く覺  
侍り同十七日より観音堂にて七日の  
別時を始行したまふ結縁値遇の道  
俗遠近親疎の往詣までも各勇  
猛の志を一にして共に慇懃の廻

向をいたす其行儀の次第昼夜  
十二時に結番して一時に數十人  
の時衆をさたむ調声ハ上人在世  
より聖一人つとめられけるを正応  
六年武州村岡にして病悩危急

におはしける時人々いたはり申け  
れハそれよりそ始て時衆の中につとめ  
侍けるしかるに参詣の人申云行法ハ  
いつもの御事と申なからこれハ故上人  
御往生のとし月にも相当給へり道  
場も又むかしにかはらぬ跡なりとて頻  
にすゝめ申ける間聖調声を勤らる  
行業功つもし薫修徳たけて弥  
信心をもよをす在世のいにしへ今更  
思出給けるにやそゝろに落涙し給  
けるを見奉るに心あるも心なきも  
涙をなかし袖をしほらぬたくひハ  
なかりけるとそ凡錚々たる金磬の  
響の中に同心称名の声雲をう  
かち片々たる香煙の薫する所に  
大衆踊躍の行地もとゝろくはかり  
なり天衆も定て影向をたれ地  
神も争随喜し給はさらむと覺ゆ  
于時秋已に半たけて夜の虫うらみ  
ねむころに風の音やゝ身にしみて暁  
の露たもとをうるほす蒼波漫々とし  
て紺目四大海の観こらさゝるにを  
のつから心にうかふ青山峨々として  
白毫五須弥の相おもはさるに猶眼  
にさいきる緑松枝をましへて宝樹  
檀林の粧をかり衆鳥みきはにた  
はふれて鳧鴛鴦のさへつりを  
模すおきつなみまにいさり火の影  
のほのめくにつけては苦海沈淪の  
たくひをあはれミ入江のほとりに秋  
の月のしろきをみても聖衆俱会  
の楽おもひやらるすへて所をえたる  
勤修おりにあへる行法ことにふれて  
信を催さすといふ事なしこの時  
聖よみ給ける

わすれめやあきをかきりのうき雲に  
そらかくれせし月のおもかけ

めぐりあふおなし日かすハ秋なから

またみぬ月のくもかくれかな

おほよそ報恩の間別時の程貴

賤の結縁道俗の値遇その数

をしらすあさけに出る旅客も

征馬をとゝめて必十念の名号を

うけゆふへにかへる浦人も漁舟

をすてゝ先十指の掌をあはす

清末法万年の利益をおもふに

もはら師資二代の弘通にさか

りなるものをや不知大権の薩

唾かりに胎蔵の生を受けて有縁

の衆生を度する歟又不知弘経の

大士暨く穢土の報を感じて

無量の群類を救歟抑如来在

世にも時所相応して法をとき

たまふとそ経にもみえて侍へる

しかれハ滅後の遺弟報恩のつ

とめも時所相応して感応あ

るへきおもむきこの時思あはせら

るゝよし人々申あへりすへて浄戒

持律の僧侶より破戒無慚の男女

にいたるまで信力人の命をかね

す恭敬わかこゝろよりおこれり清

浄無漏の結縁なるへし最初

引接の悲願たのみあるもの歟

## 第二段

乾元々年秋の比武州浅提と

いふ所におはしけるに又小野社

神主実信于時出家  
法名願阿進状云去

年九月廿四日夜夢想云聖当社

に参詣給て御宝殿の大床へ

上り給に禰宜安重外陣の妻

戸のまへに畳をしけり彼妻戸を

うしろにあてゝ坐給て十念唱たまふ

処に御正体一面上人の左の袂に

落かゝり給安重御殿の東の妻

戸より出て大床に倍て申云御神

体は一御箱を社の箱と点して

かのはこにおさまりて道場の守

護神となるへしと誓給て上人の袖

に飛移給なりと申あひた彼御

正体を十二光の一箱に奉納とみ

て夢覚りへ取要<sup>レ</sup>霊夢嚴重也と

いへとも自然に日月を送るところに

今年九月八日夜寅刻又ゆめに

願阿社参するに耆年の僧一人現

て云聖の行法他にことなり仏法の

守護神となりて彼道場を曜さむ

ために嚴重に所示也御正体を今

まてかゝへおしみ奉条不被心得云々

此時身心恐怖して夢覚畢仍

御正体一面八乙女の絵一枚送進

候任先度夢想一御箱に可納給

と申侍る間任記文納奉き昔行教和

尚金剛般若を講読し給しかハ宇佐八

幡宮其信心の堅固なる事を感じて

本地の三尊忽に袂に現給即彼御

体を石清水に移し奉き今上人専

修正行の徳用をほとこし給小野大

菩薩其行化の真実なるに応し

て垂跡の御体まさしく袖にかゝ

り給仍御正体を十二光の箱に納奉

畢時代遙に隔れりといへとも感応

の不思議これひとしき者歟

## (巻第十下)

### 第一段

嘉元々年臘月恒例の別時は

相州当麻といふ所にて修せられ

けるにいつもの事なれば貴賤

あめのことく参詣し道俗雲の

如く群集すさて念仏結願の後

晦の暁元日の朝大衆に對して

法文のたまふ事あり一切衆生曠

劫以来六趣に輪廻して或時は

有頂の煙霧に交て併有為の

快樂に愛着し或時は阿鼻の

湯火に咽て鎮に無間の勤苦に

梵燒す此故に諸仏如来法性真

如のみやこを出て遙に結縁引

導の方便をめくらし弥陀善逝

は安養浄刹の堺を越てまの

あたり来迎引接の本願を發給  
仏心者大慈悲是以無縁慈撰諸  
衆生と云へり慈悲は觀世音の  
体也觀音は娑婆至現の形也今  
大悲闡提の願を發して濟度  
衆生にむかふ我こそ觀音なれと  
の給けるをめつらしき事の給  
ものかなと人皆思あへりけるに  
下野国小野寺のなにかしとかやいふ  
人のもとより不思議の靈夢をみ  
たりとて記文を送れり其詞曰仏子  
某去廿七日夜の曉夢に金色の  
阿弥陀仏を拝す傍に菩薩ま  
します大勢至也觀世音の見え給  
はぬあひたいかなるいはれにて  
侍やらむとゝひ奉るに仏  
のたまはく觀音をは濟度  
利生のために娑婆へつかはす  
其名を他阿弥陀仏と号す  
勢至菩薩をもつかはした  
りき一遍房といひしか帰来  
れるなりと示給云々（記録及委細  
恐繁取要）  
聖の詞にやかて符合しける  
間諸人弥謁仰の首をかた  
ふけ道俗ますく隨喜の涙  
をそ流しける昔空也上人  
夢の中に極樂へまうて給  
たりけるに中央に空き華  
座ありき事の故を衆会の  
聖衆にとひ奉り給ければ  
此国の教主は阿弥陀仏と  
申す衆生利益のために  
南閻浮提日本国に出給へり  
其名をは八幡大菩薩と号す  
とのたまひければ奇特の  
思骨髓にとおりて夢さめた  
まひけるよし或旧記にみ  
えたり加之律宗には好相  
をみて受戒の得否をしり  
真言には靈夢を得て悉  
地の感応あらはすといへり  
異域には漢明帝魯仲尼

みなよるのゆめをもちる紀  
里記王の十夢阿難尊者の  
七夢をのゝ其まことなる  
事をえたまへり三国の例  
証一にあらすたれもうた  
かひをなすへからさるをや  
抑弘安二年六月より嘉元々  
年十二月にいたるまで首  
尾廿七ヶ年の間臨終す  
る時衆惣して二百六十  
九人也（僧四十八  
尼三十九）此内制  
戒に背く旨ありといへ  
とも廻心せさりける間往生  
をとけさるもの七人ありけ  
るとなむ縦小罪なりとも  
制戒にそむく事あらは  
尤廻心し侍るへきものをや其  
外の在家の弟子非人の  
類にいたるまで往生をとく  
るもの其数をしるすにいと  
まあらず昨日は如来の滅  
後に生たる悲を沙羅  
林の露にそへ今日は弥陀  
の名号に逢るよろこひを  
歡喜樹の花にひらく  
今生は穢土の終聖衆来  
現の夕には速遂無生即  
生之往生後世は浄土の  
始蓮華初開之朝には  
早得生即無生之法忍者  
歟今まのあたりかくのこと  
くの勝利を見る争信  
心を發すゝらむ仍彼行状  
をあらはさむためにこ  
の絵図をうつすたゝ是  
信謗ともに因を成し  
親疎おなしく縁をむす  
はむとなり

（奥書）

徳治第二之天初夏上旬之候  
馳筆終功畢

本奧云

弟子宗俊宿因多幸而奉逢上人之濟

度得聞出離之要法言其恩德高於天厚

於地仍自建長文永之往事至永仁正安之行

儀凶師資之利益備弟子之報謝類集

而為十卷殆揚十之一二此中或有四句偈

或有七言頌或有人之返報或有自之詠

謔皆惟出離生死之肝心往生淨土之要路

也至段々詞者僅記錄愚意之領解更不話

賢哲之後難苟思其事實不好其事華唯

欲見者之易論聞者之深誠者也就中遠及於

遐代遍為備人之結緣置一本於道場若依

此繪圖有發心之人者互去婆婆苦域同至安養樂邦而已

## 遊行上人絵伝巻第八 一巻

### 第一段

同国小笠原といふ所におはしける時  
日蓮か門弟等念仏勸進無謂  
とて道場へ乱入して云一代の教  
法にハ法華をもて本懐とし五時の  
配立には妙法をあげて醍醐に  
たとふ而に爾前権門の念仏を  
もて正因正行となつけ速疾頓  
成の妙宗をもて雑修雑行と  
下す誹謗大乘の過のかるゝ所  
なし仍今祖師と号する善導法  
然等無間に随在す先祖猶しかり  
況末資をやといひて事を法門に  
よせて狼藉をひき出へきけしき  
みえける間委細の返答に及す  
善導法然地獄におちらるゝよし  
の事さも侍覽如溺水之人急

須救すけうといへり地獄に入て勤苦の

衆生をたすくるハこれ大悲闡提の  
誓なりとこたへ給にまたく利生の  
ためにあらず大乘誹謗の故なりと  
重て難する間汝誹謗の罪によりて  
おちらるゝと心得たらむによりてかの  
人地獄に墮すへきにあらずおちた  
りと心得たらハ汝か心のうちの善導  
法然ハさこそあるらめとのたまひ  
ければ是非をいはずへからすとて  
をしよする処に在家人あまた  
立ふさかる中にときはのなに  
かしかやいふものすゝみ出て云  
在々処々の利益これにかきる  
へからす遺恨あらはいづくにても  
謝したてまつるへし左右なくこゝ  
にて狼藉をいたさハ一身の恥辱  
万人の嘲哂也たまゝあひかた  
き知識にあふことをえたり名聞利  
養の昔ハ心は恩のためにつかはれ  
命ハ義によりてかるかりき欣  
求浄土のいまハ心を本願にかけ  
て命をちしきにたてまつるなといひ

しろふほとに刃をましへ鉾をあら  
そふへかりける間聖両方の中に  
わけ入て云仏法といふハたかひに  
自他をわすれ人我を離て談  
する事也をのゝけしきあしく  
みえ侍り不審のこらは後  
日にきたりたまへけふハすみ  
やかにかへらるへしとうちわら  
ひてのたまひけれハ偏執をた  
をし慢心とらけゝるにや  
日蓮か門弟等引退てことゆへ  
なくしつまりにけりもし雌  
雄を決し是非をあらそはまし  
かはゆゝしき人の大事な  
らましを身命をかへりみすな  
ためられければにやことなる  
子細なくしつまりにけりいと  
ふしきなりける事にこそ

### 第二段

同国板垣入道といふ人聖に対面  
ありけるに念仏法門領解して  
当国修行の間ハ常に値遇し奉  
けりさて國中利益の後御坂に  
かゝりて相州へ趣給此山ハ名を  
得たる嶮路余にこえたる難所也  
青巖峯遠して雲旅人の衣を  
うつミ白霧山深して露行客の  
袖を濡す而に彼人年齢已に傾て  
首の霜をはらひむそちの坂をこえ  
て聖を送り奉けむ懇志の至いと  
哀にこそ侍れ聖いたはしくや思はれ  
けむ乗馬すへきよし度々のたま  
ふせけれども知識の歩行にてお  
はするにいかゝ馬にハ乗へき年お  
いおとろへ侍れハ惜ともかひあるへき  
身にもあらず只かちよりこそとて  
其日ハ河口といふ所までつきぬ老  
耄の身なれハ余年も幾ならず  
後会又其期をしらす今生の面  
拝もこれをかきりとかなしみける  
いとことほりにこそ侍れさて夜明けれハ

出給にたもとにとりつきておさなき  
ものゝ母をしたふかことく声をたてゝ  
なきかなしみけれハいかに心なきも  
袖をしほらぬたくひハなかりけるとそ  
家を出世をのかれさらん程ハかくて  
しもあるへきならねハいつくにても  
往生をとけ給はむのみこそ本  
意なるへけれとて子息ともあまた  
ありて心ならずとりかへしける間同  
生を華開の朝に期し再会を  
終焉の夕に契たてまつりてなくく  
とゝまりぬさて宿所に帰けれとも  
いと心も身にそはすなりゆきけ  
れハ持仏堂に入り聖の真影に  
向て涙をなかしつゝ会者定離ハ  
有為無常の境なれハ歎ともかい  
あるへき身にもあらずとく浄土に  
まいりて不退の友となりたてまつ  
らむとて水食をとゝめて一心に念仏  
す子息親類とかくいさめけるをも  
用すして十一日を経てつゝに往生  
をとけにけり或ハ合戦鬪諍の  
禍にあひ或は恩愛離別の悲  
にひかれて命をすて身をほろほす  
是皆輪廻の妄業にしてまたく得  
脱の因縁に非あらずこれハ出離の  
要法を聞往生の安心をあたへられ  
奉ぬる恩徳を思芳顔をしたひて  
忽に思しにしける事ためしすくな  
くこそ侍れ彼雪山童子の身をなけ  
常啼菩薩の肝をさきし皆深位  
の大士法身の薩埵の化儀なれば  
申にをよはず末世の凡夫にをきてハ  
かゝるふしきありかたくこそ侍れ  
山路にてよみ給ける

うへもなき思やきえしふしのねの  
けふりハいまはめにもかゝらず  
雲よりもたかく出たるふしのねの  
月にへたゝるかけやなからん

### 第三段

越後国波多岐庄中条七郎藏人と

いへる人正応六年の比聖に対面し  
奉て他力本願の謂念仏往生の  
安心にもとつきて後分段生死の堺に  
心をとゝめす老少不定のことはりに  
思をかけて所領財宝妻子眷  
属の愛執著心を翻して只後生  
菩提の営より外は他事なかりけ  
るか真の知識二遇たてまつりて往生  
遂侍らむ事永劫を経とも争  
報謝し奉へきとて感涙をなかし  
けり其後出家して浄阿弥陀仏と  
なむいひけるか所勞つき侍けるに  
病中の間或ハ光明を見或ハ音  
楽をきく化仏菩薩尋声到一  
念傾心入宝蓮と唱てもろくの  
菩薩聖衆たちの影向しましくけ  
りとて落涙し侍けるにほそらかなる  
光二すち浄阿弥陀仏の頂を  
照す此時掌を合て即紫雲たな  
ひきてしはの樞に立廻といふ讚を  
頌して一心に來迎を待苦痛増  
氣する時ハ慈悲加祐令心不乱と  
こそ見えたれ我力ならはこそいか  
なる苦痛ありともなとか念仏の  
申されさるへきとて高声念仏  
百遍はかり申て息絶ぬ于時靈光  
赫奕として晴天にかゝやき異香芬  
郁として内外に薰す骨を拾時  
又紫瑞空に見えて音楽雲に  
きこゆ骨ハ皆五色にして仏舎  
利のことし願力かきりなけれハ正法  
末法時を扱事なく機縁むなし  
らされハ在家出家人を嫌事なし  
往生を遂るもの多しといへともけにかゝ  
る靈異ハありかたかるへきにや

### 第四段

越前国敦賀氣比太神宮ハ大日  
如来の垂跡仲哀天皇の崇廟也  
天皇九年異国へ発向せむとし給  
し時長門国豊浦宮にて崩御の  
間神功皇后懷妊たりなからつゝ

三韓を責平て帰朝の後皇后

十三年みつから神主と成て祭礼を

始行給しよりこのかた星霜一千

余廻を経て崇敬七十余代あら

たまらず北陸幽奇の祠壇をひら

きて華夷静謐の官社にそなふ

專異国征伐の儀式をもて猶本

朝鎮護の祭祀とす夏杓秋嘗の

礼欽仰年旧たり朝祈夕賽の輩

効驗日新なり抑此地ハ東に翠

嶺あり朝の日利生の光を耀かし

北に蒼海あり夜の月和光の影

をうつす是以漁翁の釣をたるゝ

生者必滅のことほりをかたとり

遊女の棹をうつす会者定離の

悲をあらはす爰正安三年聖当

社へ参詣ありけるに或人霊

夢をみる社頭のうしろの森に

白鷺（当社仕者）数をしらす群集す

なに事そとかたはらの人に

たつぬるに道をつくらるへき評

定也と云々しかのみならず当

社前大祝兼盛瑞夢の告を

かうふるによりて西門の道を

つくりて聖にふみはしめさせ

たてまつらむと思侍りけれども

社家の一大事たやすく人力の

をよふへきにあらすとて歎なから

年月を送よし聞給てきてハ

やすき事にこそと仰られける

ほとに社司神官等大に悦て

先繩を引て道のとをりをさ

たむ広さ二丈あまり遠さ三丁

余也さてもそのあたりハおひたゝ

しき沼なりけれハすへてうむ

へき土のたよりもなかりけるを

聖社頭より四五町はかりゆきて

浜の沙をはこひはしめたまふ

ほとに時衆の僧尼われもく

とそあらそひける其外も諸国

帰依の人近隣結縁の輩

貴賤を論せず道俗をいはす

神官社僧遊君遊女に至まで

七日夜の間は肩をきしり踵

をつけり海浜人倫を成し道

路市のことし加之社頭を掃除し

宮中を崇敬して沙をちらし

石をたゝましめ給大方玉をみかき

鏡をかけたるかことし聖の道徳

にあらすハ争この大功をなさむ

此間瑞異おほしといへともさのミハ

事しけきによりてしるしのこ

し侍り